

2016. 6. 21 (火)

「あなたたち」という言葉の意味をめぐって

阿部 潔

私にとってのチャペル

みなさん、おはようございます。社会学部チャペルアワーでお話する機会を持つのは、これで何回目でしょうか。最後に話したのがいつのことなのか、正直すぐには思い出せません。多分、それなりに慌しく日々を過ごしていると、ゆっくりと、じっくりと物事について考える余裕がなく、ただただ時間だけが過ぎてしまう。そんな日々の有り様だから、折角、チャペルで講話をするという素晴らしい機会をあたえてもらっても、そこで得た経験はすぐに忘却の彼方へと行き去ってしまう。あらためてそのことに思い至り、日頃の自分のあり方を深く反省しました。また、そんな自分の今の姿に気づく機会を与えてくれたのも、やはりこのチャペル講話の機会でした。そのことを心から嬉しく感じています。済みません、前置きが長くなりました。

それではここから、本日の話をはじめたいと思います。阿部が担当する今日の回を含んだチャペルアワーでの共通テーマは「真理はあなたたちを自由にする」です。この聖句の意味は、みなさんもう十分にご存知でしょうし、このテーマが取り上げられるのは今回がはじめではないので、過去にこの聖句について取り上げたほかの方の講話を、すでにお聴

きになった人もおられるかと思います。ですので、この聖句それ自体については、私からはあえてなにも申し上げませんし、また、そもそも聖書の言葉について詳しく語る知識も素養も持ち合わせていません。今日はただ、この不思議な言葉に込められていると私自身が考えることについて話したく思います。その際に、ここ関西学院で、さらにここ社会学部で「学ぶ」ということの意味を念頭において、私自身が個人的に考える、あるいは感じていることについて拙い話をさせていただきます。

人を「自由に」するもの

「真理はあなたたちを自由にする」。

いきなりこのように言われると、私たちの多くは少しばかり戸惑うのではないのでしょうか。なぜなら、「自由にする」とことと「真理」とは、日常の感覚ではそう容易に結びつかないからです。ここで仮に「自由」という言葉の意味を、「なにかからも制約されることなく、自分自身の意思に従い、己のやりたいようにする」とことだと理解しましょう。そのように定義すると、むしろ私たちの日頃の感覚に照らして考えたとき、「自由」を保障してくれるのは「真理」ではなく、もっとほかの事柄の

ように思えるのではないのでしょうか。

まず思い浮かぶのは、「お金」です。現在の資本主義社会に生きている私たちは、「なにかが欲しい」とか「あの商品を手に入れたい」と思ったとき、それを買うための十分なお金を持っていなければ、それができません。「あの服を着てみたい、あの時計を付けてみたい」と望んでも、お金がないためにそれができない。そんなとき、私たちはとてもつらく悔しい思いをする。そこにおいて人は、ひどく「不自由」を感じるのです。そうした経験は、だれにでもあるでしょう。「もつとお金があれば、もう少し経済的な余裕があれば、思い通りに欲しいものが手に入るのに！」このように考えがちな現代人たちにとって、「お金がある」ことはとても分かりやすいかたちで「自由」をもたらしてくれる存在です。

次に考えられるのは「権力」です。ここで言う権力とは、別に政治家や軍人が発揮する問答無用の「力」のことではありません。もっと私たちの身近に溢れている、対人関係における力のこと。要するに、自分の思うように人を動かしたり、わざわざそうしなくても、相手が自ら進んで自分の思うことや望むことをしてくれる。そんな自分にとって都合のいい状況を可能にしてくれるような力を、ここで権力と呼びましょう。そのように考えてみると、案外私たちは「権力」を行使していて、その結果、色々な「自由」を享受していることが分かるのではないのでしょうか。例えば、大学の部活やサークルでは多くの場合、学年が上のメンバーの方がなぜか偉いとされていることはありませんか。組織の中での上下関係のもとで、表面上はみんな対等な立場で話し合いながら物事を決めるにして

も、どこかで「上の学年の人の言い分に従おう」と考えたり、また力をふるう当人たちも「下の者は、自分たちの言うことに従うべきだ」と、どこか普通に考えたりしてはいませんか。少し冷静に考えれば、なんとも不条理なこうした組織の慣習に、学年が下の人たちがさして文句も言わず従うのは「いずれ上位回生になれば、自分たちがやりたいように部活やサークルを運営していける」と期待しているからにほかなりません。ここに見て取れるのは、まさに「権力」による自由の実現です。

「もうひとつ」の世界

なんだか話が授業の講義のようで、聴いている皆さんが眠たく感じているのではないかと少し心配になってきました。ここまで見てきたように、わたし達の日常生活における具体的な場面を振り返りながら、なによって「自由」が可能になるのか、別の言葉でいえば「なにが私たちを自由にしてくれるのか」について考えてみると、まずはお金と権力が浮かび上がりました。ですが、聖書の言葉は、お金や力ではなく「真理」が「あなたたち」を、つまり、そこで呼びかけられている「わたしたち」を自由にしてくれると言うのです。これは一体、どういうことなのでしょう。

なにも私は、わけ知り顔で説教めいたことを述べるつもりはありません。例えば「お金や力よりも大切なことが世の中にはある。それは真理だ。だからそれを大切にしてください！」と教訓をたれたところで、日々色々な場面で「金と権力」に取り囲われている人々、とりわけ厳しい実社会に生きている若

いひとたちに対して、それが心に響くとは到底思えない。なぜなら、目の前の現実を見渡せば、カネと力によって「自由」を謳歌している大人たち、たとえば最近の例を挙げれば、首都東京の長の立場にいるのをいいことに、自分の趣味や家族のために公的資金を使っていた人物が議会やメディアの厳しい非難を受けて辞任しました。もちろん、当の本人は自分の浅ましい行為に対して道義的責任を負うべきです。ですが同時に、私たちの多くは、こうしたスキャンダルを暴かれた政治家の姿を見て、それが決して彼ひとりの問題ではなく、今の世の中のあり方を象徴していると感じることでしょう。カネと力があれば自分の好きなようにできる。他人に邪魔されず「自由」に振る舞えてしまう。それこそがいま現在の社会のあり方なのだ。深い諦めと、いささかの羨望が入り交じった複雑な心境をもって、そのように事態を眺めている人も少なくないはずです。

たしかに、そうなのかもしれません。でも、この不思議な聖句に真摯に向き合うとき、お金と権力に満ちた今の「この世」とはいささか違った、別の「この世」の可能性が見えてくるのではないかと。私は、そんなふうを考えたりします。いきなりこんなことを言うと、皆さんには怪しい勧誘に聞こえるかも知れませんが、どうぞご安心を。私がこれからお話することは、過激な宗教思想やいかかわしい霊感ビジネスではなく、ごく当たり前の「物事を考えることの楽しみ」について、つまり「学ぶ」ということの魅力についての、ささやかなお誘いに過ぎませんので。

「あなた」ではなく「あなたたち」

お金があれば、力があれば、人は「自由」になれるのではないかと。先程の具体事例を思い出すと、そのことはある程度当てはまるように思えてきます。そうすると、今日のテーマである「真理はあなたたちを自由にする」という聖句自体が間違っている、あるいは少なくとも現代の状況には当てはまらない、そんな結論になってしまいます。ですが、ここでもう一度、聖句の文言に注意を向けてみましょう。「真理はあなたたちを自由にする(The Truth shall make you free)」。私はここで、「あなたたち」という文言に見て取れる「たち」という言い回しに少しこだわってみたい。ちなみに、わたし自身が今の皆さんくらい若かった当時、この聖句を「真理はなんぢらに自由を得さすべし」との表現で学びました。そのときに感じた「なんぢら」という言葉の不思議な響きと、それについて自分なりに考えたことを話します。

わざわざ説明する必要もありませんがこの「たち」や「ら」という言葉は、英語で言うところの二人称複数形の翻訳です。つまり「あなたひとり」や「汝ひとり」ではなく、「あなたたち=汝ら」という表現は、聖書という言葉によって呼びかけられる「人々の集まり」全体を想定している。そのうえで、この「真理」とは、その集まりそれ自体を「自由にする」ものである。聖句の意味を、このように理解してみましょ。すると面白いことが見えてきます。

「お金」や「権力」が人を「自由」にしてくれるように思われるとき、その恩恵にあずかるのは「あなたたち=汝ら」ではなく、特定の「あなた=汝」に過ぎません。今日の経

済社会、とりわけ資本主義社会は互いの競争によって成り立っている。そこでの競争とは、「だれかが儲ければ、だれかが損をする」ことを意味します。最近ビジネス業界では「ウィン・ウィンの関係構築が大切！」などとお気楽に言われますが、それはあくまでビジネスのパートナー同士のあいだでの話です。実際には、彼ら／彼女らが「ウィン・ウィン」を享受している裏で、どこかでだれかが「ルーズ・ルーズ」の憂き目にあっている。それが分かっているからこそ、ビジネスパーソンたちは日々必死になって「ウィン・ウィン」をもたらす相手を探しているのでしょう。ここからも、お金がもたらしてくれる「自由」は、決して「わたしたち」みんなに当てはまるものではなく、特定の「わたし」に限定されることが分かります。そうした事情は、権力についても同じです。「力を持つこと」が人を自由にしてくれるのは、それによってほかの誰かが不自由になるからです。サークルで物事を決めるという場面を思い出してみましょう。上位学年のメンバーが自由に振る舞えるのは、後輩たちが自分たちに課される不自由をしぶしぶとであれ受け入れるからです。ここでも「あなたたち」ではなく特定の、この場合ならば最上位学年になった「あなた」が、権力によって自由になっているに過ぎません。

「分かち合う」という悦び

さて、このように考えてくると、この聖句に潜む深い意味が少しずつ分かってくるのではないのでしょうか。たとえ外見上はお金や権力によって自由に振る舞えるように思われても、それは実のところ「あなた」に関しての

ことに過ぎない。では、「真理」については、どうなのでしょう。それはどうして、「あなたたち」、つまり真理に呼びかけられる「わたしたち」すべてを自由にするといえるのでしょうか。

私が考える理由は、以下のようなものです。聖句が唱える「真理」とは、お金や権力のように人々のあいだで取り合ったり、奪い合ったりすることで価値や意味が生じるものではなく、むしろ反対に、人々のあいだで分かち合われることによってはじめて、その価値が生み出される。そして、真理から呼びかけられて他者とのあいだで「分かち合う」ことへと導かれるからこそ、わたしたちは「自由」になりうる。だからこそ、「真理はあなたたちを自由にする」と言えるのだ。そのように、私は考えてみました。

でも、いくら抽象的に話をされても、おそらくみなさんの多くにとってあまりピンとこないでしょうね。今日の阿部の話は、たとえ説教じみてなくても、なんだが社会学の講義みたいで面白くない。もし、あなたがそのような感じたのであれば、今日の私の拙い講話にも意味があったとうことです。なぜでしょうか？

そのわけは、「真理はあなたたちを自由にする」の真意とは、まさに学問の楽しさとその意義を示すものにほかならない。世俗者である私は、そう理解しているからです。学問において追究される「答え」は、誰かに独占されることで意味をもつものではありません。それとは真逆に、より多くの人々に分かちもたれて、その意味で「わたしたちすべて」の共有財産となってはじめて、その「答え」は少しだけ真理に近づくことができる。もちろん、そこには「終わり」などあろうはずがな

い、どこまでも／いつまでも／だれとでも、それを追い求めるという営みにこそ、「学問する」ことの醍醐味が潜んでいます。このように考えると、日々大学という場でほかの誰かと一緒に「学ぶ」こと自体が、実のところ「真理はあなたたちを自由にする」との聖句の呼びかけに対する、ひとつの応答なのかもしれません。色々な相手と関わり合い、話し合い、分かち合うというきわめて日常的な営みを介して、少しでも「真理」に近づくことができたとき、きっとお金や権力によって好きなように振る舞うのとは根本的に異なる、他者との関わり合いに根ざした「自由」を手に入れられるはずで

最後に、一言だけ付け加えたいと思います。今回取り上げた「たち」という複数形が意味する相手には、学問の世界において「真

理」に向けそれぞれの営みを積み重ねてきた先人たちが含まれます。今はもうこの世にはいない幾多の者たち。その逝きし子どもの道行きの末列に加わることができれば、もしかすると、なにかしらの「救い」が今の私たちに与えられるかもしれません。ただ、残念ながらどこまでも世俗的である私には、それ以上のことは分からない。ですが、この世を去った者たちから受け継いできた「真理」という遥かな途には、そこへと人々を誘う力が確かにある。そのことだけは、半世紀にわたる自分の人生を振り返るとき、不思議な確信をもって言えるような気がしています。

ご清聴、ありがとうございました。

(社会学部教授)